

# 創立二十五周年 江戸川学園物語 第二回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。「小さき足跡」十二号は、創立二十五周年を記念して江戸川学園物語をまとめられ、昭和三十一年十一月に発行されました。原文のまま連載します。

環境と発足 木内きぬ

江戸川学園が誕生してから廿五周年になる。人生で言えば青年期への第一歩を踏み出したわけになる。

此の記念すべき秋に当つて、学園の誕生から幼年期、少年期頃を思い出してたどたどしい筆を運んで見ることにする。

小岩の町は今でこそ人口八万を数える繁華街に発展しているが、私達一家が此の土地に移り住んだ頃（大正十三年七月）は南葛飾耶小岩村といつて、寂しい農村地帯に過ぎなかつた。

春先になると作物に撒いた肥料の上をからつ風がビュビュ吹きまくつて来て、小岩に居ると陽にやけるといふよりは肥料に顔がやける。

一帯が低い土地なので至る処に池を堀つて稍稍高い土地を作つてぼつぼつ、家が建つて行つた。

今の昭和通りの中央部にも矢張り大きな池があつて、雨が降るとそれが溢れ出て交通を妨げる。駅附近まで買物に行くのに私達は尻はしよりで跣足でよく出掛けたものである。私の家の前は五七坪の池で裏は百坪餘の細長い池、更に東側は八十坪餘の真四角い蓮池になつて居た池の廻りには一面に芦が生い茂つていて、何処までが地面で何処から池になつて居るのか一寸判別がつかない。子供達はこうした環境の中で跳ね廻つては蛙を捕え、蜻蛉をとらえて遊んで居るので、よく足許をばづし池に落ちて仕舞う。今の校長先生もその被害者の一人であつた。丁度其日は従姉が久し振りに来訪せられて一家はそのままてなしに忙殺されて居た。何だか裏の方が騒々しいので外へ出て見ると長男が池に落ちて通りすがりの老母がそれ見付けて漸く助け上げた処であつた。顔は土のようでお腹は妙にふくれ上つていた。私は夢中で五才の長男を抱いて医者へ走つた。全身をがたがた震わせ乍ら……

それから何年かして前の森口さんの長男がとうとう池に命を奪われてしまつた。雨が降ると池はどんどん自分の領域へ土を迎んで敷地を狭めてゆく、私は池を鑑賞するような心の余裕を失つて、池そのものを憎むようにさえなつた。でとうとうなげなしの金を投じて池を全部埋めて、子供達の生命を守ることを餘儀なくされたのである。

こうした環境の中に、佐久間タネ氏が現れて小数の若い女性を集めて女塾を始められた。（私の家の裏で、現在松江第二中学校の校長小花先生の住宅になつて行つた。この塾が他年曲折を経て、今日の江戸川学園の発展へと運命づけられて行つた。）

その頃（昭和五年）満州から帰国された松岡キン女史は、小岩に於ける女子教育の重要性を痛感せられて、自らの博識経験をよりよく生かして、私立の女学校経営を思い立つたのである。

佐久間女史にどう渡りをつけたか、私は知らないが免に角、同氏から備品並に生徒そのままの譲渡を受けた松岡女史は、教育の場を外に求めなければならなかつた。

丁度その頃小岩小学校は校舎が新築されて、古い用材は不川になつた女史はそれを譲り受けて、校地三四五坪を現信用金庫理事長宮崎庄衛氏から借り受けて、ここに初めて現校地にクリーム色に塗れた校舎一五二坪の完成を見た。

城東高等家政女学校の名称の許に松岡キン女史は第一代の校長に就任。

翌昭和七年に江戸川高等家政女学校と改称せられた。本科修業年限四年定員八〇名 裁縫専修科一年定員四〇名 研究科一年定員二〇名となつて居る。

その頃の女史には若さがあつた。美しくさがあつた。そしてたくましい実行力があつた。学校は女史の夢を乗せて、その手腕の上に、生徒数漸増の一路を辿つて行つた。女史の薫陶をうけた卒業生は女芸二通りは仕込まれ、堅実な思想を植え付けられていたので、近郷近在からお嫁さんの申込みが、よく学校を訪れて来た。

私が親しく松岡女史の全貌に接したのは、昭和七年、流木先生がつぼみ保育園を創設せられたその時の開園式の時であつた。私の次男は当時第一期の入園生として荒木先生の門をたいたいたので、私は父兄の一員としてはからずも松岡女史と同席の奇遇に恵まれた。

その時の女史のお話の内容は忘れてしまつたが、実に場慣れて居て、幼児をあかせない、父兄も面白く引ずつて行く巧妙さを持つて居られた。

人中へ出て堂々と話せる女性の極めて稀であつた当時の小岩にも、こうした女性の有ることは心強かつた。女史が地元の婦人達から押されて、婦人会々長を務めて居られたのも決して偶然ではなかつた。然し女史が育て上げた婦人会も戦後隣組の解消と同時に、戦争の犠牲となつて跡方もなくなつてしまつた。終戦直後 地元の人達からの懇請によつて、沢が青葉婦人会を創設し、秤様の協力によつて、三年会長を務めさせて戴き、その地盤を堅めて行き、そして現在、江戸川学園の理事長を務めて居る。何だか眼に見えぬ絆が女史と私を結びつけつていふような気がしてならない。

女史が学園創設苦難の道を歩いて十年、生徒の激増は校舎の増築を餘儀ないものにして行つた。校舎西側に上下四教室の増築を企てられたことは決して無理からぬこと。然し世人は儲かる事業への投資は易いが、儲からぬ学校経営への投資は決して呉れない。建てさえすれば何とかなるだろうと思つた予想は完全に打ち破られてしまつた。

（出典：小さき足跡十二号「創立二十五周年江戸川学園物語」）

## 創立二十五周年 江戸川学園物語 第二回

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。「小さき足跡」十二号は、創立二十五周年を記念して江戸川学園物語をまとめられ、昭和三十一年十一月に発行されました。原文のまま連載します。

### 運命のいたづら

北原白秋年譜によると、彼が南葛飾郡小岩三谷に、虹間から転居したのは、大正五年の七月で彼にとつては新婚早々の三十二才の時であった。翌大正六年の六月には動坂に移っている、一年あまり此の小岩に歩を止めたことになる。小説『葛飾文章』や『雀の生活』は小岩に於ける彼の産物とも言える。ジプシーの群のように転々とし居を変えて行つた彼ではあつたが、この土地にしばしの地歩を止めたことは、全じ土地に後から移り住んだ私達の興味を引くに充分であつた。

それは昭和十五年九月末の秋日和の一日、小岩七丁目にある白秋の居住跡を尋ねて見ようと思ひ立つて、ぶらりと私達夫婦は家を出た。帰途学園の前を通りかかると新校舎は釘着けにされて建築主の名の許に売屋札が生々しく掲げられてあつた。生徒達はそれを尻目に旧校舎の方で依然として授業は続けられていた。私達は異様な感に打たれると同時に、全じ教育者としての立場から、松岡女史の心情に思ひを致し、暗然として『何とか方法はないものかなあ』などと語り合つたりした。無残な姿を暴したままの幾日かゞ過ぎて、とうとう家屋札は取り去られ、新校舎に嬉々として学ぶ生徒達の姿を見るようになった。私達は全く救われた思ひでほつとした、然しそれも束の間の事で、学園の実権は買牧者の佐久間弘氏に移り、女史は依然として校長のイスには居られたもの、所詮教育者の使命と実業家の使命とは一致しない、採算の取れない学校経営を何時まで女史にゆだねて

黙認する筈はなかつた。遂に実権者は学園を改造してアパートにすると言ひ出した。苦節十年此処まで育て、来た愛児をどうして見殺しに出来得ない。女史の苦悩は此処に於て頂点に達したに迎ひない。かくて白父の矢は今ほ亡き木内栄三郎に向けられたのである。木内は当時本所で公立青年学校長としての重責をになつていたが、教育者としての全じ立場から女史の苦衷を思い再参の要請に對して、背を向けるわけにはいかなかつた。其処で木内は女史と同道して同郷の財閥で幼友達であつた佐藤金属株式会社社長佐藤保氏を訪問した。氏の回答は女史に取つては冷徹そのものであつた。『木内君がやつて行こうというなら、その一族は皆教育者であるから、将来に望みをかけて出資をするが……』と言われる。が……の後の説明を考えた時、木内は学園引き受けは辞退せざるを得なかつた。当時若手の校長とし都からも同僚からも将来を囁目されていた彼としては、公職を捨て、まで学園に殉ずる気持は更々なかつたから……だが、時をうつせば学園はアパートに変貌する。女史は愛児の危急存亡の時に當つて、自ら身を捨て、その再建をはかる事に意を決した。女史と言えども女なればなかなか此のふん切りはつくものではない。

学園の後継者は此の人をおいては他にない、と臨を決した女史の慧眼は、矢つぎ早に木内の門を叩いた。かくて女史の熱ど誠意は流石がこんで通り意志の人で通つた木内を動かすことに成功したのである。

遂にバトンは渡された。平静を取戻した女史は『急によい息子が出来ましてね……』などと戯言を言われたりした。

現在女史は八十六才の高齢で、小岩の五丁目に静かな餘生を送つて居られる、学校の行事には時折出て来られて、卒業生に取囲まれ、昔話しをなさつたりする。おとしを尋ねると『私はいつも十三七つ、お月さんと全じ年ですよ。』と笑つていられる。

先日編集部員が訪問して女史のお話しをテープレコーダにおさめて来たが、語調も確かと言うことも確かりして居られる。

「小さき足跡」は、当時の江戸川学園理事長であった木内きぬ先生が原稿を執筆し、江戸川女子高等学校の先生と生徒が編集した冊子です。十二号は、創立二十五周年を記念して、江戸川学園物語をまとめられました。原文のまま連載します。

バトンは渡されて

世評紛々木内は江戸川学園を乗取つたとか、四人の子供をかゝえて公職を捨てて一体どうする心算だろうとか、何と言われても彼は齒がゆい程口をつぐんで語らない。ひたすら佐藤氏の友情と、松岡女史の信頼に答うべく黙々として使命達成への道を歩いて行つた。

昭和十五年十一月五日、江戸川高等家政女学校の備品一切の所有権並びに学校経営権は広瀬弘氏から木内栄三郎に譲渡された。

彼は純粋の教育畑の人で、青山師範と日本大学国漢科出という基盤の上に立つて、その生涯に終止符を打つまで四十年間教育街道をまっしぐらに突進して行つた。

性豪放磊落といおうか、豪胆不敵というか、せゝこましい教員タイプの鑄型の中におさまらないではみ出してしまふ荒けずりの一面があるかと思うと、実に細かい所によく気がついて、大きく人を包んで行く雅量と、寛容さを持ち合せて居た。

人間木内の意志と信念はぐんぐん自分に溺れる周囲を引きづつて行つて明朗活潑な性格の中にとけこましてしまふ。それは青山師範の校長滝沢菊太郎先生の薫陶の賜であつたらう。彼が教師としての振出しは駒本小学校で、最初尋常一年生を担当した。それから六ヶ年を通して全じ子供を担当して行つたのだから、師弟間の愛情は肉身の愛情にまで深まつて行つた。

月給だけ俯けばよい、規定時間だけ要領よく務めればよい、自分達の増俸運動の爲なら、授業をさぼつても仕方ない、自分に都合の良い条件が見つければよいと生徒を投げ出して行つてしまふ。そう言つた考え方とは凡そ遠いものがあつた。

彼は学科では地理が好きであつたので、当時の教子松井湧君は東大卒業後、地質学研究室に居残られたのも多分その影響ではなかつたらうか。駒本で職員間の新旧思想の圧礫によく六ヶ年を堪えてきたのも教子達が可愛いかつたからである。その教子達の卒業と同時に、校長の机の上に『氣息隠々小心慾孤児』の改名を奉つて今は亡き椎名竜徳先生の傘下に馳せ参じてしまつた。

生き乍ら改名を奉られた人の微笑を思い浮べて隠忍六ヶ年の溜飲を彼は一時に下

げたものであつた。

椎名先生の配下で、近藤、櫛引（現神田高校の校長の兄弟）木内は三羽鳥と言われ、又三頭政治などとも言われて、自分の教育に対する主張を生かし得るようになった。

話が半分横道にそれてしまつたが、公立畑の彼が私学に身を投じた事はいろんな意味で学園にプラス面が多かつた。木内個人としては捨て切れぬ椅子を捨て、来たのであつたが、彼は先づ学園に於ける教育方針を確立した。

要約してみると

物質文明は刻一刻その進展を見るが、逆に思想の堅実味を失いつゝある。其の原因は精神の修養を怠り、実際実力養成よりも知そのものに走つた結果で文化の中毒である。今之を治済するものは女子教育の改善に待たねばならぬ。女学校卒業という『レツテル』よりも内容の充実を計らねばならない、つまり精神修養と合せて女子に必要な知識技能をみがき、実際実際へと女子将来の生ある生活に進む。毎日朝礼には五分間の黙想をする。其の日一日を自らに誓う。つまり今日一日は決して嘘を言わぬ。今日一日必ず一善を撰ぶ。一日一善の実行を重ねて将来の自己を完成する。黙想の後『金剛石』を歌う。

勤労五則を朗唱して、凡ての仕事には創意工夫が伴わねばならぬと強調した。

更に彼は私学経営五ヶ年計画を樹立した。昭和十九年三月江戸川女子商業学校が設置され文部大臣の認可があり、初めて中等学校としての取扱いを受けるようになり廿一年江戸川高等女学校と改称せられるに至つた。昭和十八年から全十九年にかけては応募者の入学率は六人に一人という状況で、校長は入学試験の直後は行衛不明になつてしまふ。仕方なく私は不合格者のなだめ役をしなければならぬ始末。狭い校舎に七百名からの生徒がくらししている、其処へもつて来て東京学園が焼け出されて同居しているのだから、何処へ行つても人、人につかつてしまふ。

昭和廿三年の七月PTAの方々（会長山崎豊氏）が校庭の西側に二教室を増築して学校に寄付をして下さつたのでその混雑はいくらか緩和されるようになった。

勤労五則は校長が卒先して実行にうつして行つた。教室は糠を以つて磨かれ、廊下には紙屑一つ落ちていない。軍事会社に動員されて行つた生徒達は実によく働いた、今思いは空しい可愛想な努力に終つて了つたが……この頃成績優秀で誰にでもよく好かれた高津けい子さんが日立の防空壕で直撃弾をうけて即死されてしまつた悲しい思い出もある。

敗戦という打撃はさなきだに感じ易い乙女には堪らない程のショックとなつて、ひび入つた壁がぼろぼろ落ちて行くように、何処の学校にも不良の生徒が表れるようになった。